Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.10*, pp. 225-244, 2017
信州大学教育学部研究論集　第10号　pp. 225-244　2017年

＜翻　訳＞

叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (XXXXI)[1]—

茂 木 秀 淳　元信州大学教育学部

キーワード： ジャナカ王，生活期，解脱，ヴェーダの伝承と読誦，プラーナ風

[312 章] (B.325 章, C.12215-12259, K.333 章) シュカの生涯 (4) ジャナカ王の宮廷訪問

ビーシュマは言った。

(1)　シュカは，解脱について考えた後，父に近づいた。そして，師に挨拶した後，幸福 (śreyas) を求めるシュカは，礼儀正しく言った。

(2)　「もろもろの解脱の教えに (mokṣadharmeṣu) 通じた尊者は，私に，どのようにして私の心 (manas) に最高の寂静が生じるのか，お話し下さい，威力ある方者よ。」

(3)　最高の聖仙は，息子の言葉を聞いて，彼に言った。「息子よ，解脱について学べ。そしてさまざまな教え (dharma) についても学びがよい。」

(4)　ブラフマンを知る者たちの中ですぐれた者であるシュカは，父の命によって，すべてのヨーガの教義とカピラの説いた教義とを[2]理解したのである，バーラタ族の者よ。

---

[1]本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (XXXX)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 10 号 (本号)) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1889]: E.W.Hopkins, The Social and Military Position of the Ruling Caste in Ancient India, As Represented By The Sanskrit Epic, JAOS vol.13, 1889, pp.57-374. (Published as a monograh at New Haven Conn. in 1889.)
- Hopkins[1901]: E.W.Hopkins, Yoga-technique in the Great Epic, JAOS vol.22, 1901, pp.333-379.
- Hopkins[Great Epic]: E.W.Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint Caluctta 1978.
- Hopkins[1902]: E.W.Hopkins, Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata, JAOS vol.23, 1902, pp.109-155.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, *Epic Chronology*, JAOS vol.24, 1903, pp.7-56.
- Strauss[1912]: Otto Strauss, Ethiscche Probleme aus dem “Mahābhārata”, Tipografia Galileiana, Firenze, 1912.
- 原 [1972]: 原實『報恩 –ānṛṇya–』佐藤博士古稀記念仏教思想論叢 1972, pp.1100-1079.
- Hara[1980]: Minoru Hara, Hindu Concepts of Teacher, Sanskrit Guru and Ācārya, Sanskrit and Indian Studies (Essays in Honour of Daniel H.H.Ingalls), 1980, pp.93-118.
- Hara[1987]: Minoru Hara, Invigoration, Hinduismus und Buddhismus, Festschrift für Ulrich Schneider, Freiburg, 1987, pp.134-151.
- Oberlies[Grammar]: Thomas Oberlies, Grammar of Epic Sanskrit, (Indian Philology and South Asian Studies 5) Berlin 2003.

[2]yogaśāstraṃ ca nikhilaṃ kāpilaṃ caiva　Cf.Hopkins[Great Epic]: Kāpilam, Kapila’s own system, p.99, fn.1.

(5)　かのヴィヤーサは，素晴らしい幸運をもち，ブラフマンに匹敵する威力をそなえた息子が,，解脱の学問に通暁したと考えた時,

(6)　「ミティラーの王ジャナカのところへ行きなさい。彼は汝に解脱の意味を全て詳細に話すであろう」と言った。

(7)　父の命によって彼は，ダルマの基盤と解脱の本質 (parāyaṇa) を尋ねるために，ミティラーのジャナカ王のところへ行った[1]。

(8)　(シュカは父に) 言われた。「汝は高慢にならず，人間の通る道を行け。空中を行く超自然力によって行ってはならない[2]。

(9)　正直に道を行け。安楽を求める道を行ってはならない。もろもろの個物は (viśeṣāḥ) 求めるべきではない。なぜならば，もろもろの個物は執着を引き起こす[3]からである。

(10)　かの人々の王が祭主である時，(祭官の子として祭主から敬われる汝は) 慢心 (ahaṃkāra) を起こしてはならない[4]。彼の意志に従え。彼は汝の疑問を断つであろう。

(11)　かの王は，ダルマに通じ，解脱の聖典に通暁している[5]。私の祭主である彼の言うことは何でもためらわずに実行すべし。」

(12)　このように言われて，ダルマを本性とする尊者はミティラーに行った。空中を通れば，海もろともに大地を越えることができたが，両足で (行った)。

(13)　彼は山々を越え，もろもろの川や池を渡って，そして多くの猛獣や野獣で一杯のさまざまな森を (通って),

(14)　メール山とハリ山の間の二つの平地，そしてヒマラヤ (山間の) 平地を[6]順次越えて，バーラタ族の国に着いた。

(15)　かの偉大な尊者は，漢族やフン族の住むさまざまな国を見ながら，このアーリヤ人の国に (āryāvartam) やって来た。

---

[1]P.,K.: agaman maithilaṃ janakaṃ nṛpam　B. ādāya jagāma mithilāṃ nṛpa

[2]na prabhāvena gantavyam antarikṣacareṇa vai　Cf.Hopkins[1901]: *prabhāva*, magical power attained in the popular Yoga, p.337.15.

[3]prasaṅginaḥ　Cv. prasaṅginaḥ, vighnaprasaṅgakarā ity arthaḥ / (prasaṅginaḥとは，障害への執着を作る，という意味である)

[4]ahaṃkāro na kartavyo yājye tasmin narādhipe　Cf.Ganguli, Vyasa was the priest or Ritwija of the house of Mithila and as such the kings of Mithila were his *Yajyas* or *Yajamanas*. The duty of *Yajamana* is to reverence every member of the priest's family (p.85, fn.1)

[5]mokṣaśāstraviśāradāḥ　Cf.MBh.XII.308.5, 313.31

[6]varṣaṃ haimavataṃ　Cv. haimavataṃ, himavata uttarabhāge sthitaṃ kiṃpuruṣam / (haimavatam とは，雪山の北部にある Kiṃpuruṣa (=Kiṃnara 侏儒)(の平地) を，という意味である)

(16)　父の言葉を理解し (ājnāya)，その意味だけを考えつつ，彼は，空中を行くことはなかったが，あたかも空中を行くかのごとくして[1]，道を越えて来た。

(17)　美しい町々や大きな街々，そして種々の宝石を，シュカは見ても見なかった (paśyan na paśyati)。

(18)　彼は，もろもろの心地よき庭園，住宅，そして清浄な沐浴場を，そしてもろもろの路を通りすぎて[2]，

(19)　彼はほどなく，偉大なダルマの王ジャナカによって守護されたヴィデーハ国に到着した。

(20)　そこで彼は，多くの米，飲料，食糧のあるたくさんの村々，そしてたくさんの牛小屋に満ちた多くの村落と牧人の集落を[3]を見つつ，

(21)　そして米と牧草が豊富で，ハンサや鶴が訪れ，何百という美しい蓮の花で飾られている (集落を見つつ)，

(22)　豊かな人々の住むヴィデーハ国を過ぎて，彼は，心地よく大変に豊かなミティラーの苑林 (upavana) に着いた。

(23)　象や馬や車に満ち，男女で賑わうミティラーの苑林を，見ても見ぬかのごとく，心乱れず通り過ぎた[4]。

(24)　彼は，心でその (解脱の) 重荷を運び，その意味だけを様々に考えつつ，心中に喜びをもち (ātmārāmaḥ)，清明な心で，ミティラーに着いたということである。

(25)　ミティラーの門に着いて，門番たちによって遮られたが[5]，瞑想に専念し，立っていると (sthito)，解脱 (を求めていること) が知られて，(門の中に) 入ったということである[6]。

---

[1]P. khe'caraḥ khe carann iva　B. khacaraḥ khecarann iva　K. khacaraḥ khe patann iva　Cv. (gloss: sūryaḥ) khacaraḥ (khacaraḥは，太陽である)　Ganguli: like a bird passing through the air (p.86.2)

[2]P. so 'tikramya tathādhvanaḥ　B.,K.: so 'tyakrāmad athādhvagaḥ

[3]pallīghoṣān　Ca. pallī, mlecchālayān ghoṣān ābhīrapallīḥ / (pallīとは，ムレッチャ族の家々を，という意味であり，ghoṣān とは，アービーラ族の小さな家々を，という意味である)　Cs. pallīghoṣān, ābhīranivāsān gonivāsāṃsś ca / (pallīghoṣān とは，アービーラ族の家々と牛のもろもろの住居とを，という意味である)　Cf.Hopkins[1889]: *pallīghoṣāḥ*, the small barbarian settlements called *pallī*, p.77.19.

[4]tat samatikrāmad acyutaḥ　Cf.Oberlies[Grammar]: 6.4.1 Augmentless imperfect, p.178.9.

[5]P.,K.: dvārapālair nivāritaḥ　B. niḥśaṅkaḥ praviveśa ha (=P.26.d)　B. では P.25b-26c が欠落している。P.25a 句 (=B.25a 句): tasyā dvāraṃ samāsādya の後，B. は P.26c 句の pārthivakṣyam āsādya の次の句 (P.26d 句): niḥśaṅkaḥ praviveśa ha を B.25cd としている。B. において写本が筆写される時，25a: samāsādya までを筆写した後，26c: āsādya に視線が戻り，2 行飛ばしてしまう視線乖離 (eye skip) が起こったと推理される。K. にはこの現象は起こっていない。

[6]P.,K.: sthito dhyānaparo mukto viditaḥ praviveśa ha　B. tatrāpi dvārapālas tam ugravācā nyaṣedhayan (=P.27ab)

(26)　彼は，豊かな人で満ちた大通りに (rājamārgam) 達し，王の住いに[1]着くと，ためらうことなく入ったということである。

(27)　そこでもまた門番たちは，脅すような言葉を発し，彼を妨げた。それでもシュカはそこに怒ることなく立っていた。

(28)　彼は，暑さと道中に苦しめられ，空腹・喉の乾き・疲労もあったが，衰弱することも疲弊することもなかった。そしてまた暑さから逃れようともしなかった。

(29)　しかし門番たちの一人に，哀れみが生じた。中天の太陽のように (堂々と)[2]立っているシュカを見て，

(30)　(その門番は) 礼儀正しく礼拝し，合掌して挨拶した後，そこから王宮の二番目の[3]区域に (kakṣyāṃ) 入らせた。

(31)　大きな威光をもつシュカは，日影でも日向でも等しく見て，そこに座り，ただ解脱のみを考えていた。

(32)　まもなく (muhūrtād iva)，王の家臣が合掌して彼に近づき，そこから王宮の三番目の[4]区域に入らせた。

(33)　そこで，奥宮に結びついた，大きな宝車のごとき，心地よき蓮の花の咲き，美しく飾られた水の遊園のある，

(34)　その最高の家を，家臣はシュカに見せ[5]，ふさわしい座所を示して，そこから再び外へ出て行った。

(35)　すると彼に向かって，姿美しく，よい腰つきをした，若く好ましい容姿の，薄く赤い衣を見につけ，純金の飾りをつけ[6]，

(36)　会話も褒め言葉も巧みで，踊りと歌に長じ，笑顔をたやさず語り[7]，アプサラスたちに匹敵する姿をし，

(37)　愛の所作に巧みで[8]，心を読むことができ (bhāvajñāḥ)，すべてに通じた，五十人を越える後宮の主だった女たち (nāryo vārumukhyāḥ) が，走り寄って来た。

---

[1]pārthivakṣayam　Cs. pārthivakṣayaṃ, rājamandiram / (pārthivakṣayam とは，王の宮殿に，という意味である)

[2]madhyaṃgatam ivādityam　Cf.Hopkins[1903]: words to mean 'midday', in connection with *abhijit* and *aindra*, p.10, fn.2.

[3]P.,B.: dvitīyāṃ　K.: prathamāṃ

[4]P.,B.: tritīyāṃ　K.: dvitīyāṃ

[5]P. tad darśayaitvā sa śukaṃ mantrī kānanam uttamam　B. śukaṃ prāveśayan mantripramadāvanam uttamam K. taṃ darśayitvā sa śukaṃ mantrī janakam uttamam

[6]taptakāncanabhūṣaṇaḥ　Cf.Hopkins[Great Epic]: parallel phrases in the two Epics, No.85, *taptakāncanabhūṣaṇāḥ*, p.413.33.

[7]smitapūrvābhibhāṣiṇyo　Cf.Hopkins[Great Epic]: parallel phrases in the two Epics, No.323, *smitapūrvābhibhāṣiṇī*, p.442.36.

[8]P.,B.: kāmopacārakuśalā　K. bhāvopacārakuśalā

(38)　(彼女たちは) 足濯ぎ水などをもち，最高の接待 (pūjayā parayā) によって称え，場所と時刻にふさわしいよき食事によっても満足させた[1]。

(39)　彼が食事をすると，親愛なる者よ，彼女たちは，あの奥宮の園林で (antaḥpurakānanam)，それぞれに[2]大変心ひきつけるものを見せたのである，バーラタ族の者よ。

(40)　女たちは，遊び，笑い，歌った。その時，心を読むことのできるすべての女たちが，高貴な心をもつシュカをもてなしたのである。

(41)　しかし，火起し棒より生まれた，心清浄な者は，三種の疑問をもち，三種の行為をなし[3]，感官を支配し，怒りを制御し，喜ぶこともなく，怒ることもなかった。

(42)　この最高の女たちは，贈物にふさわしい，高価な敷物が敷かれ，宝石に装飾された神々しい寝台と座所を，彼に贈った。

(43)　しかしシュカは，足を清め，薄暮に (saṃdhyām) 礼拝した後，自分の目的のみを考えつつ，清浄な座所に座った。

(44)　その威力ある者は，初夜にそこで瞑想に集中し，中夜には作法に従って睡眠をとった。

(45)　彼の賢者は，それからまもなく起きて，すぐ清めを行なった後，女たちに囲まれたままで，禅定に入った。

(46)　このようにして，クリシュナの子 (kārṣṇiḥ) シュカは，その昼の残り，そしてその夜を，動揺することなく，王の住いで過ごしたのである，バーラタ族の者よ。

[313 章] (B.326 章，C.12260-12311, K.334 章) シュカの生涯 (5) ジャナカ王の教え

ビーシュマは言った。

---

[1]P. deśakālopapannena sādhvannenāpy atarpayan　B.,K.: kālopapannena tadā svādvannenābhyatarpayan

[2]ekaikaśyena　Cf.Hopkins[1902]: *ekaikaśyena*, the late derivative of *ekaika*, p.131.6.

[3]P. trisaṃdehas trikarmakṛt　B. niḥsaṃdehaḥ svakarmakṛt　K. niḥsandehas trikarmakṛt

Ca.　saṃdehavyudāsārtham eva trīṇi karmāṇi śravaṇamanananididhyāsanāni kṛtavān / yadvā / trikarmakṛt, yajñādhyayanadānaparaḥ / yadvā dehikam āhāravihārādikarma prāṇāyāmādikam iti / (疑問を除くために，三種の行為を，すなわち，聞・思・修を行った。あるいは，trikarmakṛt とは，祭式・ヴェーダ学習・布施に専念する者は，という意味である。あるいは，霊魂に属するもの，食事・散歩などの行為，気息の制御などからなるもの (という三種の行為) を，という意味である)

Cs. trisaṃdehaḥ, triṣu gārhasthyādyāśraneṣu sandeho yasya / kim utpannajñānena śarīrotpattyanantaraṃ brahmacaryāvasthāyāṃ vidite paramātmatattve kiṃ gārhsthyadiṣu sthātavyam uta neti sandeho yasya / trikarmakṛt, bhikṣādhyayanaguruśuśrūṣākṛt / (trisaṃdehaḥとは，triṣu，すなわち，家住期など生活期において，疑問をもつ者は，という意味である。身体の発生直後に知識が生じた者はどうすべきか，梵行期の段階において最高我の真理が知られた場合，家住期などに居るべきか、あるいは，居るべきではないか，という疑問をもつ者は，という意味である。trikarmakṛt とは，乞食・ヴェーダ学習・師への従順を行う者は，という意味である)

Cv. triṣu, mokṣetarapuruṣārtheṣu sandehaḥ aniṣiddhaś ced astu, niṣiddhaṃ ca māstv iti / (triṣu 三種における，すなわち，解脱とは別の人の (三種の) 目的において，sandehaḥ 疑問は，禁止されていなければ，あってよいが，禁止されたものは，あってはならない)

(1)　翌朝 (tataḥ) ジャナカ王は，家臣たちと共に，バーラタ族の者よ，宮廷祭官，そしてすべての女官たちを先頭にして，

(2)　そして，座所や種々の財宝も先頭に置き，頭に贈物を載せて，師の子息に近づいた。

(3)　その時，彼 (王) は，たくさんの宝石で飾られ，高価な敷物が敷かれた，あらゆる点で美しいで豪華な座所を受け取って，

(4)　宮廷つき祭官が持っていたそれを手づから取って，最高の敬意として師の子息シュカに与えた。

(5)　(ジャナカ王は) そこに座ったそのクリシュナの子に，決まりに従って (śāstratas) 挨拶した。まず足濯ぎ水を差し出し，客に呈する水と牛とを差し出した。そして，彼 (シュカ) は，その聖典に従った懇ろな接待を (mantravatpūjām) 作法どおり受け入れた。

(6)　すぐれた再生族シュカは，ジャナカ王からのその接待を受け入れ，牛 (を受け取るの) に同意し，王に敬意を表して，

(7)　大きな威光をもつシュカは，家臣を引き連れた王の幸福と繁栄，そして健康とを (返礼に) 尋ねたということである，王の中のインドラよ。

(8)　彼に許されたので，高貴な人柄 (sattva) と家柄をもつ王は，合掌して，家臣と共に地面に座った。

(9)　王は，ヴィヤーサの息子に幸福と繁栄を尋ねた後,『お出でになったのはなぜですか』と尋ねた。

シュカは言った。

(10)　あなたに幸いあれかし。私は父に,『私の祭主であるヴィデーハ国の王ジャナカという方は，解脱・ダルマ・利益を知る者として有名である。

(11)　もし汝の心に「(ダルマは) 活動にあるのか，無活動にあるのか」という疑問があるならば，すぐに彼のところに行け。彼が汝の疑問を断ち切るであろう』と言われました。(Cf.MBh.XII.229.2)

(12)　かくして私は，父の命により，あなたに尋ねるためにここに来ました。それを私に，ありのままにお話し下さい，ダルマを保持する人々の中で最もすぐれた方よ。

(13)　バラモンはこの世で何を為すべきですか。解脱という目的 (mokṣārthaś ca) は何を本質としているのですか。どのようにして解脱は達成されるのですか。知識によってですか，あるいはまた苦行によってですか。

ジャナカ王は言った。

(14)　誕生を初めとする，この世でバラモンが為すべきことについて聞くべし。聖紐の授与の済んだ者は (kṛtopanayanaḥ)，ヴェーダに専念すべし，親愛なる者よ。(Cf.MBh.XII.226.2)

(15)　苦行によって，師への奉仕によって，梵行によって，力強き者よ，邪心なく，神々と祖霊たちに対する債務をなくさねばならない[1]。(Cf.MBh.XII.28.54, 226.7)

(16)　もろもろのヴェーダを学び，心を抑制し，謝礼を贈り，承認を得た後，再生族は，(師の家から) 帰るべし。(Cf.MBh.XII.226.3)

(17)　家に帰ったならば，家長期の生活において，妻をめとり，欲を抑えて生活すべし[2]。そして，不平を言うことなく，規定どおりに祭火を灯すべし。

(18)　しかし，息子と孫を得た後は，森の生活期の住いで，規定通りにこれらの祭火を尊重しつつ，客を歓待して，生活すべきである。(Cf.Strauss[1912]: *Vānaprastha*, pflegen die Feuer, p.254(62).22)

(19)　森において，適切にもろもろの祭火を自分の中に固定した後 (āruhya)，ダルマを知り，対立なく執着を去ったならば，その者は，ブラフマンの生活期の住まいで生活すべきである[3]。

シュカは言った。

(20)　永遠にして明らかな知識と認識が心に生じても[4]，どうしても (kim avaśyam) もろもろの生活期において，そしてもろもろの森の中で，生活しなければならないのですか[5]。(Cf.Strauss[1912]: der Standpunkt der eigentlichen *Nivṛtti*, p.256(64).18)

(21)　このように私はあなたに尋ねます。このことをあなたはお話し下さい。ヴェーダの真の意味に従って (yathāvedārthatattvena)，私にお話し下さい，人々の主よ。

ジャナカ王は言った。

(22)　知識と認識なしには[6]，解脱の獲得はなく，師との結びつきなくして知識の獲得はない，と言われている[7]。

---

[1]P. cāpy anṛṇaś cānasūyakaḥ　B.,K.: cāpy anṛṇo hy anasūyakaḥ　Cf. 原 [1972]: 三負債，MBh.XII.28.54d に関連して，p.1082, 注 (5).

[2]P. sadāro niyato vaset　B.,K.: svadāraniyato vaset

[3]brahmāśramapade vaset　Cn. brahmāśramaḥ, saṃnyāsāśramaḥ / (brahmāśramaḥとは，遊行の生活期である) Cs. brahmāśramapade,　pārivrajyasthāne / (brahmāśramapade とは，遊行の状態において，という意味である)

[4]utpanne jñānavijñāne pratyakṣe　(B. nirdvandve) hṛdi śāśvate　Ca. jñāne, tattvajñāne / vijñāne, ariṣṭādijñāne / (jñāne とは，真理の知識が，という意味であり，vijñāne とは，前兆などの知識が，という意味である)

[5]P. āśrameṣu vaneṣu ca　B. āśrameṣu bhavet triṣu　K. āśrameṣu vaneṣu vā

[6]P. vinā jñānavijñānaṃ　B.,K.: vinā jñānavijñāne　Cn. jñānaṃ, śāstrajā dhīḥ / vijñānam anubhavaḥ / (jñānam とは，聖典より生じた英知であり，vijñānam とは経験知である。

[7]na vinā gurusaṃbandhaṃ jñāsyādhigamaḥ smṛtaḥ /　Ca. atra madhye 'na vinā gurusaṃbandham' iti ślokārdhaṃ kecit paṭhanti tad asaṃgatam / (ある人々は，ここ (b 句と c 句の) 中間で,「師との結びつきなしにはない」という半偈を読んでいるが，それは不適切である)

(23)　「師は船頭であり[1]，彼の知識は船である」と世間で言われている。(このことを) 認識し，為すべきことを為して，川を渡った者は，その両者を捨てるべし。

(24)　もろもろの世界が破滅しないように，もろもろの行為が破滅しないように，古の人々によって，四種の生活期に一致した[2]ダルマが定められた (ācaritaḥ)。

(25)　多くの誕生において順次なされたこの行為によって，善悪の行為を為した後[3]，解脱と呼ばれるものがこの世で獲得されるのである。

(26)　多くの輪廻世界での誕生において，さまざまな原因が清められることによって[4]，この心清浄となった者は (śuddhātmā)，第一の生活期において解脱を得るのである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: three stadia unnecessary, opposed to the orthodox Brahman's insistence, p.183.19)

(27)　それを得て，解脱し，目的を獲得したならば[5]，最高者を得んと願う賢者にとって，(それ以後の) 三つの生活期にいかなる意味があろうか。(Cf.Hopkins[Great Epic]: three stadia unnecessary, opposed to the orthodox Brahman's insistence, p.183.19)

(28)　常に，ラジャス的な，そしてタマス的なもろもろの欠点を避けるべし。サットヴァ的な道に立って，アートマンによってアートマンを見よ。

(29)　(解脱した者は) あらゆる生き物の中にアートマンを，アートマンの中にあらゆる生き物を見つつ，汚れることはないであろう。水鳥が[6]水中で (汚れないの) と同様に。(Cf.Manu 12.91ab)

(30)　鳥が水浴びの後で上方へ (と飛翔するか) のごとく[7]，解脱した者は，身体を捨てて，対立なく，寂静に至り，来世において無限性 (ānantya) を得るのである。

(31)　ここで，ヤヤーティ王によって詠まれたいくつかの古い偈頌を聞くべし。それらは解脱の聖典に通暁した[8]再生族たちによって受持されてきたのである，親愛なる者よ。

---

[1]P. ācāryaḥ plāvitā　B.,K.: guruḥ plāvayitā

[2]P. cāturāśramyasaṃkathaḥ　B. cāturāśramyasaṃkaṭaḥ　K. cāturāśramyasaṃśritaḥ

[3]P.,K.: kṛtvā śubhāśubhaṃ karma　B. hitvā śubhāśubhaṃ karma

[4]P. bhāvitaiḥ kāraṇaiś　B.,K.: bhāvitaiḥ karaṇaiś　Ca. bhāvitaiḥ, janmāntarābhyāsavāsitaiḥ / (bhāvitaiḥとは，他の誕生における行為によって香りをつけられた，という意味である)　Cn. śodhitaiḥ / (清められた，という意味である)

[5]dṛṣṭārthasya　Cs. dṛṣṭārthasya, vidvadanubhavasiddhabrahmabhāvaphalasya / (dṛṣṭārthasya とは，知者の知覚によって完成したブラフマンの状態を果報としてもつ者にとって，という意味である)

[6]vāricaro yathā　Cn. vāricaro, haṃsādiḥ / (vāricaraḥとは，ハンサなどである)

[7]P. pakṣīva plavanād ūrdhvam　B. pakṣivat pravaṇād ūrdhvam　K. pakṣivat prāyaṇād ūrdhvam

[8]mokṣaśāstraviśāradaiḥ　Cf.MBh.XII.308.5, 312.11; Hopkins[Great Epic]: *mokṣaśāstra*, a treatise based on verses recited (by Yayāti), p.16, fn.1.

(32)　光は[1]アートマンにのみあって他のところにはない。そしてそれは，そこにおいてのみある歓喜である[2]。よく集中した意識 (cetas) をもつ人は，自らそれを見ることができる。

(33)　他者が恐れず，他者を恐れず，望むこともなく，嫌うこともなければ，人はその時ブラフマンとなる。(Cf.MBh.XII.21.4ab, 168.42, 243.5, 254.16, App.I,(No.4), lines 27-28, Harivaṃśa I.30.41)

(34)　行為によって，心によって，言葉によって[3]，あらゆる生き物に害を為さない時，人はブラフマンとなる。(Cf.MBh.XII.168.44, App.I, (No.4), lines 29-30; Harivaṃśa I.30.40)

(35)　苦行によって[4]自己を抑制し，迷妄をひきおこす嫉妬を放擲し，願望と貪欲を捨てるならば，それによって人はブラフマンたることを得る[5]。

(36)　聞くべきことに対しても，見るべきことに対しても，そしてまたあらゆる生き物たちに対しても，平等で対立をもたない時，その時人はブラフマンとなる。

(37)　称賛と非難とを等しく見る時，そして金と鉄を，苦と楽をまた (等しく見る時),

(38)　寒さと熱さを，有用 (artha) と無用を，好ましいものと好ましくないものを，生と死を (等しく見る時)，人はブラフマンとなる。

(39)　亀が手足を伸ばして，再び引っ込めるように，乞食者は，心 (manas) によってもろもろの感官を抑えるべきである。(Cf.MBh.VI.24.58, XII.187.6, 239.4 (亀の比喩))

(40)　暗闇に包まれた家は灯火によって見られるのと同様に，アートマンは統覚 (buddhi) という灯火によって見ることができる。

(41)　以上の (ヤヤーティの述べた) ことすべてを，私はあなたの中に見る，知識ある者たちの中で最もすぐれた者よ。他の知るべきことも，あなたは正しく知っている。

(42)　梵仙よ，あなたは，あなたの師の恩恵によって，そしてあなた自身の習得によって[6]，物質的領域の端に到達している (viṣayāntam upāgataḥ) ことが知られる。

---

[1]jyotir　Ca. jyotiḥ, cidrūpaṃ prakāśanam / (jyotiḥとは，知の形であり，照らすものである)

[2]P. rataṃ tatraiva caiva tat　B.,K.: sarvajantuṣu tat samam

[3]karmaṇā manasā vācā　Cf.Hopkins[Great Epic]: Parallel Phrases in the Two Epics, No.37, p.407.24.

[4]P. tapasā　B.,K.: manasā

[5]brahmatvam aśnute　Cv. brahmatvam aśnute / brahmatvaṃ, sukhabṛṃhitatvam / bṛha-bṛṃha vṛddhāv iti dhātuḥ / (brahmatvam とは，安楽の増大した状態である。bṛh と bṛṃh は，成長の意味での動詞語根である (cf.Dhātupāṭha I.772))

[6]tava caivopaśikṣayā　Ca. tava caivopaśikṣayā iti śukagauravaprakāśanārtham / yadvā, tavopaśikṣārtham iti vibhaktivyatyayena caturthyarthe tṛtīyā / (tava caivopaśikṣayā とは，シュカの偉大さを明らかにするためである。あるいは,「あなたの学習のために」(tava upaśikṣārtham) という意味で，活用語尾の交換によって，与格の意味で具格が用いられている)

(43)　あなたの師の恩恵によって，私にもこの神聖な知識が生じた，偉大な尊者よ。それによって，私はあなたを知ったのである。

(44)　あなたの認識はすぐれ，あなたの境地はすぐれ，あなたの自在性はすぐれている。しかし (ca)，あなたはそれに気づいていない。

(45)　幼さの故，あるいは疑念の故，あるいはまた未解脱の故に生じる恐れの故に，認識が生じていても，(人は) その (自分の) 境地を理解しないのである。

(46)　清浄な決意によって，私たちのような者によって疑問が断ち切られたならば，もろもろの心の結び目を解いて (vimucya hṛdayagranthīn)，その境地に到達するである。

(47)　あなたは，認識が生じ，心が安定し (sthirabuddhir)，欲望はない (alolupaḥ)。(しかし) 決意なしに (vyavasāyād ṛte)，バラモンよ，その最高者に到達することはないのである。

(48)　あなたには苦と楽の区別はない。あなたには欲望はない。あなたにはもろもろの踊りや歌に対する願望はない。あなたには執着は生じない。

(49)　あなたには親族たちに対する固執はない[1]。あなたにはもろもろの恐ろしいものに対する恐怖もない。私はあなたを，土と石と金を等しくする者と見ている，大きな幸運をもつ者よ。

(50)　私は，そして他の賢者たちも，あなたを，かの最高の不滅にして平安の道に立っていると見ている。

(51)　この世におけるバラモンの果報，解脱というものが (mokṣārthaḥ) 本性とする果報，まさにその中にあなたはいるのである (tasmin vai vartase)。賢者よ，何か他に尋ねることはありますか。

[314 章] (B.326 章, C.12312-12364, K.335 章) シュカの生涯 (6) シュカの確信とヴェーダ学習

ビーシュマは言った。

(1)　このような (ジャナカ王の) 言葉を聞いて，自己の完成した者は[2]，確信して，自己によって自己を確立し[3]，そして自己によって自己を見て，

[1]P. na bandhuṣu nirbandhas te　B.,K.: na bandhuṣv anubandhas te

[2]kṛtātmā　Cs. kṛtātmā, jitendriyaḥ / (kṛtātmā とは，感官を制御した者は，という意味である)

[3]ātmānātmānam āsthāya　Cs. ātmānaṃ parameśvaraṃ, ātmanā svarūpeṇa, āsthāya dhyātvā / (ātmānam，すなわち，最高の自在神を，ātmanā，すなわち，自分の姿として，āsthāya，すなわち，熟考して，という意味である)

(2)　為すべきことを為し，安楽を保ち，寂静となり，氷で覆われた山頂をめざして[1]，北に向かい，風のように[2]静かに進んだ。

(3)　一方その時[3]，神仙ナーラダは，シッダやチャーラナ (天上の楽人) の住む[4]ヒマラヤ山を見るためにヒマラヤ山に行こうとしていた (iyāt)。

(4)　アプサラスの群に満ち，キンナラたちの群による，そして大きな蜂たちによる歌声に満ちた (ヒマラヤ山に)。

(5)　鵜たち，鶺鴒たち[5]，種々の雉たち，彩り豊かにして百種の声で輝く孔雀たち，フラミンゴの群，喜んだ郭公たちによる (歌声に満ちたヒマラヤ山に)。

(6)　そこにはいつも鳥の王ガルーダもやって来た。そして四柱の世界の守護神たちも，聖仙の群を伴い，世界の安寧を願っていつもそこに集まった。

(7)　偉大なヴィシュヌ神はそこで息子を得るために[6]苦行を行った。そしてまたまさしくそこでクマーラは，幼年時に，神々を罵った。

(8)　三界を軽蔑して，(クマーラは) 槍を地面に突き刺した。そこでその時，スカンダ (= クマーラ) は，人々を (jagat) 罵りつつ，次の言葉を言った。

(9)　「もしも私よりもすぐれたものは他にいるならば，(私よりも) バラモンたちを好む者がいるならば，三界で力ある者で，(私のように) バラモンとしてふさわしい第二の者はいるならば，

(10)　その者は，この槍を抜いてみよ。あるいは揺るがしてみよ」と。これを聞いて，世間の人々は，「誰がこれを引きぬくことができようか」と恐れた。

(11)　その時，至尊なるヴィシュヌは，阿修羅と羅刹も含め，すべての神々が，侮辱されて感官と心が惑うのを見た。同時に「一体何がここで為すに良いことであろうか」と考えた。

(12)　彼はその侮りに耐えられなかった[7]。そして火神の子 (pāvaki スカンダ) をにらんだ。かの清浄な最高のプルシャ(であるヴィシュヌ) は，(スカンダを) あざ笑って，燃え上がる槍を左手で揺さぶった。

---

[1]śaiśiraṃ girim uddiśya　Cn. śaiśiraṃ giriṃ, himālayam / (śaiśiraṃ girim とは，ヒマラヤ山に，という意味である)

[2]sadharmā mātariśvanaḥ　Ca. mātariśvano vāyoḥ sadharmā, nityam ekatra navasan / (mātariśvanaḥとは，風と，sadharmā 同じ性質をもち，すなわち，常に一カ所に留まらず，という意味である)　Cs. vāyos tulyagatiḥ / (mātariśvanas とは，風と同じ道を通って，という意味である)

[3]etasminn eva kāle tu　Cf.Hopkins[Great Epic]: Parallel Phrases in the Two Epics, No.31, p.406.20.

[4]siddhacāraṇasevitam　Cf.MBh.V.179.4b *siddhacāraṇasevitā (devī)*

[5]khañjarīṭaiś ca　Cs. khañjarīṭaḥ khaṃjanu iti vaijanyantī / (khañjarīṭaḥとは，khaṃjanu，すなわち，空中に生じた (?)，ということから，旗である)

[6]P. putrārthaṃ　B.,K.: putrārthe　Ca. putrārthe, sānbārtham / (putrārthe とは，サーンバ王子のために，という意味である)

[7]P. sa nāmṛṣyata taṃ kṣepam　B.,K.: anāmṛṣya tataḥ kṣepam

(13)　力あるヴィシュヌ神によって槍が揺さぶられると，その時，あらゆる大地は，岩山，林，森ともども揺さぶられた。

(14)　ヴィシュヌは (槍を) 引き抜くこともできた。しかし，スカンダ王の傲慢さを擁護するヴィシュヌは，槍を揺さぶっても，引き抜きはしなかった[1]。

(15)　至尊者 (ヴィシュヌ) は，その槍を揺さぶってから，プラフラーダに次のように言った。「クマーラの力を見よ。他の者はこのように (引き抜くこと) はできないであろう」と。

(16)　プラフラーダは，その言葉に我慢ができず，引き抜くことを決心し，彼のその槍をつかんだ。しかしそれを揺さぶることさえできなかった[2]。

(17)　かのヒラニヤカシプの息子 (プラフラーダ) は，大音声を発し，山頂で気を失い，よろめいて地に倒れた。

(18)　その頃，牛を旗印とする恐ろしいシヴァは，北方に行って，山の王 (ヒマラヤ山) の山腹で，いつもの (nityam) 苦行を行っていたのである，親愛なる者よ。

(19)　燃え盛る火によって囲まれた彼の隠棲処は,「太陽の綱」という名で (ādityabandhanaṃ nāma)，未熟な者たちによっては達し難かった。

(20)　そこには，すなわち，十ヨージャナの幅があり[3]火炎によって覆われた隠棲処には，ヤクシャ，ラークシャサ，ダーナヴァたちでさえも行くことはできなかった。

(21)　力強い至尊の火の神は，思慮深いマハーデーヴァに対するあらゆる妨害を静めつつ，自らそこに立っていた。

(22)　神の千年間を一本足で立った (マハーデーヴァに対する妨害を静めつつ)。誓約堅固なマハーデーヴァは[4]，そこで (苦行を行うことで) 神々を苦しめていたのである。

(23)　一方，パラーシャラの子にして大苦行のヴィヤーサは，思慮深い山の王 (ヒマラヤ) の東方に達し，世間から離れた山の斜面において弟子たちにヴェーダを教授していた。

(24)　大幸運のスマントゥ，ヴァイシャンパーヤナ，そして大英知のジャイミニ，苦行者パイラに (教えていた)。(Cf.MBh.II.4.9, XII.327.16, 337.11)

---

[1]P. kampitā sā na tūddhṛtā　B.,K.: kampitā sā 'bhavat tadā　Cv. kampanād dharṣitā, anuddharaṇād rakṣitā ceti bhāvaḥ / (揺さぶることによって，攻撃され，持ちあげないことによって，守られもした，という意味である)

[2]P. na cainām apy akampayat　B. na caināṃ sa vyakampayat　K. na cainām abhyakampayat

[3]daśayojanavistāram　Cf.Hopkins[1902]: syntactical construction of *yojana*, prefixing the number as part of a compound, p.150.27.

[4]mahādevo　Cf.Hopkins[1903]: Mahādeva stands, as an ascetic, on one foot during a *divyaṃ varṣashasram* or thousand years divine (of the gods), p.44.20.

(25)　大苦行者ヴィヤーサは，これらの弟子たちに囲まれて座っていた。火起し棒より生じ，本性清浄にして，天の太陽のごとき者 (シュカ) は，そこで父の清浄な最高の隠棲処の家を見つけた。

(26)　その時，ヴィヤーサは，太陽に匹敵する輝きをもつ息子が，輝く火を発するがごとくして (parikṣiptam jvalantam iva pāvakam)，帰って来るのを見た。

(27)　もろもろの森にも山にも険路にも[1]妨げられず，ヨーガに集中した偉大な (息子が)，弓の弦を離れた矢のごとく[2](帰って来るのを見た)。

(28)　火起し棒より生まれた者は，近づいて，父の両足を執った (agṛhṇāt)。偉大な聖者 (シュカ) は，快く[3]彼ら (弟子たち) にも会った。

(29)　それから，シュカは，ジャナカ王との会話をすべて残りなく歓喜の心をもって父に知らせた。

(30)　このように，パラーシャラの子にして偉大な聖者，力あるヴィヤーサは，弟子たちと息子を教えつつ，ヒマラヤ山の頂に住んだ。

(31)　その後，ある時，弟子たちは，彼 (ヴィヤーサ) を囲んでいた。ヴェーダ学習を完了し，心寂静にして，感官を制御し，

(32)　六支分を含めもろもろのヴェーダにおいて完成に (niṣṭhām) 達し，極めてよく苦行を行う (atitapasvinaḥ) 弟子たちは，その時，合掌して，師のヴィヤーサに言った。

(33)　「私たちは，大きな幸運を得，光輝も増大しました[4]。しかし今，師によって一つの恩寵 (anugraha) が与えられるのを望みます。」

(34)　という彼らの言葉を聞いて，梵仙は彼らに言った。「言うがよい，子供たちよ。それが何であれ，汝らにとってよきことを為すであろう。」

(35)　このような師の言葉を聞いて，弟子たちは心歓喜して，再び合掌して，師に頭を垂れて，

(36)　彼らは共に，この最上の言葉を語ったのである，王よ。「もし師が[5]喜ぶのであれば，私たちは幸福です，最高の聖者よ。

---

[1]P. viṣameṣu　B.,K.: viṣayeṣu

[2]yathā bāṇaṃ guṇacyutam　Cf.Hopkins[1903]: the flight of an arrow, a short indefinite period of time, *yathā bāṇaṃ guṇacyutam*, (swift) as a cord-sped arrow, p.11.6.

[3]yathopajoṣaṃ　Ca.(gloss: yathāsukham)

[4]P. yaśasā ca sma vardhitāḥ　B.,K.: yaśasā cāpi vardhitāḥ　(Cf.Hara[1987]: vocaburary of invigoration, *vṛdh–*, p.150.14)

[5]upādhyāyo　Cf.Hara[1980]: *guru* replaced by *upādhyāya*, p.112, fn.45.

(37)　しかし，私たちは皆，大仙によって特権 (vara) が与えられることを望んでいます。あなたの六番目の弟子が，名声を得てはならない。この点について，私たちに恵みあらんことを。

(38)　これら私たち四人の弟子と五人目に師の子息，ここでのみもろもろのヴェーダは存在すべきです。これが私たちの望む特権です。」

(39)　弟子たちの言葉を聞いて，ヴェーダの意味の真実を知り，パラーシャラ仙の子息にして思慮深く，ダルマを本性とし，来世の利益を考えるヴィヤーサは，弟子たちに，ダルマにかなったこの上なき言葉を語った。

(40)　「ヴェーダ (brahma) は，バラモンに，教えを聞かんとする者に，ブラフマンの世界に住むことを常に願う者に，常に与えられるべきである。

(41)　汝らは多数となるべし。このヴェーダは広められるべし。しかし，弟子ではない者，誓約なき者，未熟な者には，伝えられるべきではない。

(42)　これら弟子の性格はすべて，正しく (yathārthatas) 認識されなければならない。学問 (vidyā) は，行動に注意を払わない者には決して与えられるべきではない。

(43)　純粋な金は，熱，切断，研磨によって吟味されるように，弟子たちは，家柄，性格などによって吟味されねばならない。(Cf.Garuḍa Purāṇa.112.3[1]; Cāṇakya-rājanīti, 5.2; Hopkins[Great Epic]: threefold test of gold, p.387, fn.3)

(44)　汝らの弟子たちは，命じられるべきでないことに，大きな恐れを伴うことに，命じられてはならない。学問は，理解した通りに，学んだ通りに，結果が生じるであろう。

(45)　皆もろもろの難所を越えるべし。皆もろもろの幸福を見出すべし。バラモンを先頭にして，四種のヴァルナに (ヴェーダを) 聞かせるべし。

(46)　それがヴェーダの学習であり，それは偉大な行為であると伝承されている。この世での神々の称賛のために，もろもろのヴェーダは，自存者によって創造されたのである[2]。

(47)　ヴェーダに専念するバラモンを愚かにも非難する者は，バラモンに対する嫉妬のために[3]，必ずや破滅するであろう。

---

[1]Garuḍha Purāṇa の当該箇所は次のようである。

yathā caturbhiḥ kanakaṃ parīkṣyate nigharṣaṇacchedanatāpatāḍanaiḥ /
tathā caturbhir bhṛtakaṃ parīkṣayed vṛttena śīlena kulena karmaṇā //

(金は，研磨・切断・加熱・打撃の四種によって試されるように，召使いも，態度・性格・家柄・行為の四種によって試される。)

[2]vedāḥ sṛṣṭāḥ svayaṃbhuvā　Cf.Hopkins[Great Epic]: making of the Veda, the Self-existent created the Vedas to praise the gods, p.4.14.

[3]P. 'padhyānād brahmaṇasya　B.,K.: 'bhidhyānād brahmaṇasya

(48)　不正に教える者，そして不正に尋ねる者，この両者のうち一方は滅し，他方は (vā) 嫌悪されるのである。

(49)　ヴェーダ学習の規定に関して，すべて汝らに説明した。(汝らの) 弟子たちにとって助けとなるべし。そしてこのことは汝らの心にとどまるべし。」

[315 章] (B.328 章, C.12365-12421, K.336 章) シュカの生涯 (7) ヴェーダの拡大と読誦

ビーシュマ仙は言った。

(1)　このように師匠の言葉を聞いて，ヴィヤーサ仙の弟子たちは，大きな力が湧き (mahaujasaḥ)，心喜び，互いに抱きあった。

(2)　「尊者によって，(ヴェーダの) 現在と未来について[1]示されたことは，我々の心 (manas) にしっかりと根づいた。我々は，それをそのままに行うであろう。」

(3)　再び心喜び，互いに賞賛した後，言葉をよく知る彼らは，再び師に伝えた。

(4)　「偉大な尊者よ，もし御身が同意するならば，私たちはもろもろのヴェーダを広めるために (anekadā kartum)，この山から世間に (mahīm) 行くことを願っています，遍在者よ。」

(5)　弟子たちの言葉を聞いて，威光あるパラーシャラ仙の息子は，そこでダルマと利益を伴うよき言葉を返した。

(6)　「望むならば，地上でも天界でも行くがよい。汝らは，注意深く行動しなければならない。なぜならばヴェーダ (brahma) は，多くの誤謬の中に隠れている (pracuracchalam) のだから[2]。」

(7)　そこで，真実を語る師によって同意されたので，彼らは皆，師ヴィヤーサ仙を右繞し，頭礼して，出発した。

(8)　彼らは，地上に下って，四祭官による祭式を行った[3]。そして，バラモンたち，クシャトリヤたち，そしてヴァイシャたちを祭主とした (saṃyājayantaḥ)。

---

[1] tadātvāyatisaṃhitam　Cn. tadātve tatkāle, āyatau uttarakāle ca, saṃhitaṃ, samyagdhitam / (tadātve とは，すなわち，その時に，āyatau とは，すなわち，後の時に，saṃhitam とは，すなわち，正しく述べられた，という意味である)　Ganguli: in view of our future good (p.94.8)　Deussen: als verbindlich für Gegenwart und Zukunft (p.721, v.2)

[2] brahma hi pracurachalam　Cf.Hopkins[Great Epic]: Deceitful is the Veda, p.91.15.

[3] cāturhotram akalpayan　Cn. cātrurhotram akalpayan, caturhotrasaṃjñakā mantrāḥ, cittiḥ sruk cittam ājyam ityādayo, adhyātmādhiyajñayor abhedadarśanārthāḥ, tatpūrvakaṃ pravṛttaṃ karma, cāturhotram agnihotrādikaṃ somāntaṃ akalpayan, pravartitavantaḥ / (cātrurhotram akalpayan とは，チャトルホートラという名のもろもろの祈祷文，たとえば，「匙は心，牛酪は心」などという祈祷文は，アートマンに関するものと供儀に関するものとの同一性を見ることを目的としている。それに基づいて行われる祭式である cāturhotram，すなわち，アグニホートラ祭を初めとし，ソーマ祭を終わりとする祭式を，akalpayan，すなわち，実行した，という意味である)

Cs. ekaṃ santaṃ vedaṃ caturdhā vibhajya caturvedasādhyaṃ kṛtavantaḥ / (一つであるヴェーダを四種に分割して，四ヴェーダによって成し遂げられるべきものを作った，という意味である)

(9)　彼らは常に再生族たちによって尊敬され，歓喜しつつ，家 (に住むこと) に喜んだ。彼らは，祭式の執行とヴェーダの教示に喜び，繁栄し，世間に名を知られた。

(10)　弟子たちが山を降りると，ヴィヤーサ仙は，息子と共に，静かに禅定に専念し，思慮深く人里離れた場所で座った。

(11)　厳しい苦行を行うナーラダ仙が，彼を隠棲処において見た。そして，彼に，適切な時に (kāle)，快く響く声で語った[1]。

(12)　「おお，ヴァシシュタの子孫の大聖仙よ，ヴェーダの聖音がしません。あなたはなぜ，あたかも思いにふけるかのごとく (cintayann iva)，一人で静かに禅定に専念して座っているのですか。

(13)　もろもろのヴェーダの聖音なきこの山は，月蝕の月が塵や暗闇によって輝かないのと同様に，輝いていません。

(14)　(この山は) 神仙の群が住んでいても，ヴェーダの聖音が発せられなければ，以前のように輝くことはありません。ニシャーダ族たちの家 (が輝かないか) のように。

(15)　聖仙たちも神々も力強いガンダルヴァたちも，ヴェーダの聖音を離れては，かつてのように輝かないのです。』

(16)　ナーラダの言葉を聞いて，クリシュナドヴァイパーヤナ (ヴィヤーサ) は言った。「偉大な仙人よ，ヴェーダの言葉に精通した方よ，御身によって言われたことは，

(17)　それは私の心に心地よいものです。一切知者であり，一切見者であり，あらゆるところに好奇心をもつあなたは，(そのように) 語るのにふさわしい。

(18)　三界に生じたことすべては，御身の心の中にあります。お命じ下さい，バラモンの聖仙よ。私は御身に対して何をするべきかをお話し下さい。

(19)　私が行うべきことをお話し下さい，梵仙よ。弟子たちが去った今，私の心には大きな喜びはありません。」

ナーラダ仙は言った。

(20)　もろもろのヴェーダは，伝承されないことを汚れ (mala)[2]とします。バラモンの汚れは誓約なきこと，大地の汚れはヴァーヒーカたち[3]，女たちの汚れは好奇心であります。(Cf.MBh.V.39.64)

---

[1]K. はこの詩節の前に，次の詩節を挿入している。
etasminn eva kāle tu devarṣir nāradas tathā /
himavantam agaṃ draṣṭuṃ siddhacāraṇasevitam /
(その時，神仙ナーラダは，シッダとチャーラナが訪れるヒマラヤ山を見ようとして)

[2]anāmnāyamalā vedā　Cn. anāmnāyaḥ anāvṛttiḥ, sa eva malo dūṣaṇaṃ yeṣu / (anāmnāyaḥとは，すなわち，繰り返されないことであり，それこそが malaḥ，すなわち，それらにおける欠点である)

[3]P.,B.: vāhīkāḥ　K. bāhlīkāḥ

(21)　あなたは，ヴェーダの聖音によって悪魔の恐れから生じた暗闇を除きつつ，賢明な息子と共にヴェーダを誦すべきです。

ビーシュマは言った。

(22)　最高のダルマを知るヴィヤーサは，ナーラダの言葉を聞いて，心歓喜し，ヴェーダの読誦に確固たる誓いをもって,「仰せの通りに」と言った。

(23)　そして彼は，息子シュカと共に，大声で，適切な仕方で，もろもろの世界を満たすかの如くに[1]，ヴェーダの読誦を行った。

(24)　このように読誦し，種々のダルマを声に出している二人に，海風によって引き起こされた風が非常な強さで吹きつけた。

(25)　このため,『読誦をやめよ』とヴィヤーサ仙は息子を止めた。シュカは，止められるや否や，好奇心が生じた。

(26)　「バラモンよ，この風はどこから生じたのですか。風のあらゆる動きを説明して下さい」と父に尋ねた。

(27)　シュカのこのような言葉を聞いて，ヴィヤーサは大変に驚き，読誦できない原因について，次のように言った。

(28)　「汝には天眼が生じた。汝の心 (manas) は自立しており，汚れがない[2]。汝はタマスもラジャスも捨て，サットヴァの中で確固としている。

(29)　汝は，鏡の中に自分の映像を見るかのごとく，アートマンによってアートマンを見る。自らアートマンの中にもろもろのヴェーダを入れよ[3]。(そしてもろもろのヴェーダを) 深く (buddhyā) 考察せよ。

(30)　神の道を行く者は，ヴィシュヌ神に属し，祖父の道 (を行く者) は，暗闇に属する[4]。この二つの道は，人の死後，天にそして下方に向かっている。

(31)　地上や中空において風たちが吹くところでは，次のような七種の風の道がある[5]。それらについて順次聞くがよい。

---

[1]sa śaikṣyeṇa lokān āpūrayann iva　Cf.Hopkins[Great Epic]: When they (Vedas) are “loudly recited in the proper way”, saśaikṣya, they fill other winds with fear, and therefore should not be recited when a high wind is blowing, xii.329(P.315), 23-56, p.4, fn.2.

K. には，この詩節の前に，第二十詩節に出ていたヴァーヒーカ (K. ではバーフリーカ) について，ヴィヤーサが「kīdṛśāś caiva bāhlīkā バーフリーカたちとはどんな者か」という問いを発し，ナーラダが答えるという詩節 (K.24-46ab) が挿入されている。

[2]P. svasthaṃ te nirmalaṃ manaḥ　B. svayaṃ te nirmalaṃ manaḥ　K. svasthaṃ te niścalaṃ manaḥ

[3]P.,K.: nyasyātmani svayaṃ vedān　B. vyavasyātmani svayaṃ vedān

[4]P.,B.: devayānacaro viṣṇoḥ pitṛyānaś ca tāmasaḥ　K. devayānapatho viṣṇuḥ pitṛyānapatho raviḥ

[5]sapta ete vāyumārgā vai　Cf.Hopkins[Great Epic]: *prāṇas*, seven personified creatures, Compare also 184(P.177).24, below, p.36, fn.1.

(37)　アーヴァハ (āvaha) という名の[1]第二の風は，空中で雲たちから湿潤を (獲得し)，稲妻たちから[2]最高の輝きを (獲得して)，音を轟かせつつ[3]吹くのである。

(38)　月を始めとする星宿たちの上昇を繰り返し行う風，そして偉大な聖仙たちが，もろもろの身体の内部ではウダーナとして語る風,

(39)　四海から水を持ち上げる風，そして持ち上げた後，空中で雲たちから水たちを取り去る風,

(40)　水たちと雲を結びつけて，雨神パリジャンヤに与える風，それがウドヴァハ (udvaha) という名の，最上の第三の風であり，それは常に動いている。

(41)　その風によって，暗いそれぞれの雲塊たちが，多く集められ，雨の放出を行為の終了とする雨雲たちとして[4]存在する風,

(42)　また，その風によって，当たられ貫かれると，轟く雲たちにもろもろの音が生じ[5]，(そしてそのもろもろの音は)(世界の) 保護のために集合して，雲となる風,

(43)　そして虚空の中を神々の[6]もろもろの乗物を運ぶ風，それがサンヴァハ (saṃvaha) という名の，山をも押しつぶす第四の風である。

(44)　その乾燥した勢力ある，もろもろの水分を引き出す風によって，雲たちは，引きちぎられ[7]，分解されて，雨雲たちにはならない[8]風,

(45)　恐ろしい出来事の前兆を導き (dāruṇotpātasaṃcāraḥ)，天の雷鳴をもつ風，それが第五のヴィヴィハ (vivaha) という名の大勢力の風である。

(46)　その動きの中で天の水たちが空中を流れ，そして，虚空のガンジス川の清い水を支えて存在している風,

---

[1]P.,B.: āvaho nāma　K. pravaho nāma

[2]taḍidbhyaś　Cn. taḍidbhyaḥ, vidyutvaṃ prāpya, lyablope pañcamī / (taḍidbhyaḥとは，稲妻性に達して，という意味である。遊離分詞 (gerund) 接尾辞の消失において用いられる奪格である)

[3]P.,B.: dvitīyaḥ śvasano nadan　K. dvitīyaś ca satoyadaḥ

[4]ghanāghanāḥ　Cn. ricyamāno meghaḥ pūrṇāpūrṇtvād ghanāghana ucyata ity arthaḥ / (空になった雲は，充満と空という性質のために，ghana-aghana 塊と非塊と言われる，という意味である。

[5]P.,B.: bhavanti nadatāṃ nadāḥ　K. bhavanti nadanāntarāḥ

[6]P.,K.: devānāṃ　B. bhūtānāṃ

[7]P. yena vegavatā rugṇā rūkṣeṇārujatā rasān　B. yena vegavatā rugṇā rūkṣeṇa ruvatānagāt　K. yena vegavatā tūrṇaṃ rūkṣeṇārujatā rasān

[8]P.,K.: vāyunā vihitā meghā na bhavanti balāhakāḥ　B. vāyunā sahitā meghās te bhavanti balāhakāḥ

Cn. balena paropamardena, aṃhanti gacchanti, te balāhakāḥ / pṛṣodaratvān nakāralopaḥ / ahi gatau iti dhātuḥ / (balena，すなわち他を圧迫することによって，anhanti，すなわち，進行する，それらが，balāhakāḥ 雨雲たちである。 (bala-ahaka における anh-の)n の文字の消失は，pṛṣodara(という不規則な合成語と同じ) 性質のためである (Cf.Pāṇini 6.3.109)。語根 ah は，進行を意味する動詞語根である (Dhātupāṭha I.666))

(47)　何千という光の源として[1]，大地を輝かせる太陽が，遠くからその風の中で遮られて，一つの光線をもつものとしてあらわれる[2]風,

(48)　それによって月が満たされ，甘露の神聖な器である[3]風が，第六のパリヴァハ (parivaha) という名の風である。それは疾駆する風たちの中で最上の風である。

(49)　命ある者すべての命 (prāṇān) を, 死ぬ時に[4]破壊する風，その道を死と太陽の子ヤマの両者がたどる風,

(50)　内我 (の探究) を常とする[5]静まった心 (buddhi 意識) によって，正しく探究し (anvīkṣatām), 禅定と実修を喜ぶ人々にとって，不死性に値する風,

(51)　創造主ダクシャの一万の息子たちが，それに達し，その勢いによって，もろもろの方位の端に到達した風,

(52)　その風によって覆われたならば (sṛṣṭaḥ)，滅しても，(来世に) 赴くのみであって，(この世に) 戻ることはない。それがパラーヴァハ (parāvaha) という名の[6]，最高にして超えがたい風である。

(53)　このようにこれらアディティの子供である風たちは最高の驚異であり，一切を支えつつ，あらゆる所に至り，止まることなく吹くのである。

(54)　このように，この最高の山がこの風が吹くと直ちに揺り動かされる，というのは大きな不思議である。

(55)　これは，ヴィシュヌの呼吸の風である。それが，勢いに駆られて，突然声をあげると[7]，親愛なる者よ，世界は不安になるのである。

(56)　従って，ヴェーダを知る者たちは (brahmavidaḥ)，風が強く吹く時は，ヴェーダを学ばない。なぜならば，風を恐れさせつつ[8](ヴェーダの) 聖音 (brahma) が発せられると，それ (風) が苦しめられるであろうから。

---

[1]P.,B.: yonir aṃśusahasrasya　K. yo niraṃśuḥ sahasrasya

[2]dūrāt pratihato yasminn ekaraśmir divākaraḥ　Cn. pratihataḥ sūryaḥ sahasraraśmir apy ekaraśmir iva bhāti / (pratihataḥ 遮られた，太陽は，千の光線をもっていても，ekaraśmir iva 一つの光線をもつもののごとく，bhāti あらわれる，という意味である)　Cs. ekaḥ mukhyaḥ śubhrasaṃjño raśmīnāṃ pūrako raśmir yasya / (ekaḥ，すなわち，主要な，シュブラ「白色」という名で，光線たちを満たす光線をもつものである，という意味である)

[3]P. nidhir divyo 'mṛtasya ca　B. kṣīṇaḥ saṃpūrṇamaṇḍalaḥ　K. yonir divyo 'mṛtasya yaḥ

[4]P. 'ntakāle　B.,K.: 'nukāle

[5]P. adhyātmanityayā　B.,K.: adhyātmacintakāḥ

[6]parāvaho nāma paro vāyus　Cf.Hopkins[1901]: the wind called *parāvaha*, something quite new, one of the seven Vaha winds unknown to the frequent writers on breaths and winds in the earlier epic, p.360.31ff.

[7]uddīryate　Cn. uddīryate, uccaiḥ paṭhyate / (uddīryate とは，もろもろの高音アクセントによって詠まれる，という意味である)

[8]vāyubhayaṃ　Cv. (reading *vāyubhave* for *vāyubhayaṃ* vāyubhave, vāyvantarasyotpattau, paunaḥpunyena vāyor mahāghoṣe satīti yāvat / prabalataravāyughoṣe sati guruṇoccāryamāṇavedasya śiṣyaiḥ śrotum aśakyatvāt tadā anadhyāyaḥ kartavya iti bhāvaḥ / (vāyubhave とは，別の風が発生した時には，すなわち，繰り返し風の轟音がある時には，という意味である。強風の轟音がある時，師によって発せられたヴェーダは，弟子たちによって聞くことができないので，その時は，学習されるべきではない，という意味である)

(57)　これだけの言葉を述べて，威光あるパラーシャラの息子 (ヴィヤーサ) は，息子に「学べ」と言って，天のガンジス川に行った。

(2017年 1月 4日　受付)
(2017年 3月24日　受理)